魔法少女リリカルなのは奇跡と予想外

響歌

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ソレ」は、生まれ変わり「彼」になった。

注意（この作品では、リリカルなのはシリーズＴＶ版と劇場版の内容の一部を混ぜ合わせてあります。）

目次

プロローグ
プロローグ1 ―――― 1
プロローグ2 ―――― 4
二組目の試験　前編 ―――― 13
二組目の試験　後編 ―――― 17

プロローグ

プロローグ1

誰がどうしたか俺は、主を守る存在として考えることができるよう生まれた。しかし、俺には感情がなかった。それ故に考え導き出す答えは常に最適だが、その答えはどれも冷たく主や彼女達への思いやりに欠ける物であった。

しかし、宇宙へ飛ばされ「アレ」として最後に見た光景は、自分を消そうと向かって来る巨大な光。それまで無限の命を持っていた俺は、「ソレ」から切り離された事で、自分に死ぬと言う概念が生まれそしてその死が、目の前に迫ったとき初めて死にたくないと「思った」感情が芽生えたのである。そして、その感情がトリガーとなり消え行く自分にとある奇跡が発動した。

その奇跡とは、魂の転生である。おかしな話である「ダレ」ではなく「ナニ」の存在のはずの俺に魂の転生が行われたのである。しかもその奇跡は、成功し今は「俺」として命を授かった。しかも主と同じ「ヒト」としてである。

そして、自分に完全な心が生まれ気付いた。自分が主や彼女達へやって来た無慈悲な行為を。

自分がいたから彼女は傷ついた。
自分がいたから彼女達は家族を1人失った。
自分がいたから彼は彼女は犠牲にならなければならなかった。
自分がいたから失われた命が幾つもあった。
だがそれでも俺は、生きていこう彼女達への償いのために・・・・そしてせめて彼女は蘇らせよう。
「絶対蘇らせてやるから待ってろよ××ン××ォ××」
そして、もう1つやらねばならない事がある。それは、突然現れて家族を奪ったアイツから家族を取り返し、奴の考えているであろう陸でもない考えをぶっ壊す事である。
「絶対アイツの好きには、させねえ・・・」
俺は、そう覚悟を口にして、歩みだす。共についてきてくれる5人の家族と共に俺は、歩みだした。

これは、1つの存在が1人の少年として蘇ることで、本来の話から少し変わってしまった未来が待つ話。

そしてこれは、1人の少年のいや彼ら、彼女らの奇跡が導きし話。
そしてもう1つの予想外がこの世界によばれた。

「すいませんここが何処だか分かりますか?」
「ここは、ミッドチルダの首都クラナガンだけどどうしたの?」
「ミッドチルダ?クラナガン?聞いたことないな・・・そもそもそんな名前の場所日本にあったか?だけど言葉は通じてるしだけど文字はブツブツブツブツブツブツブツ・・・・・・・・」
「え!?もしかして、キミ次元漂流者!?」
「次元漂流者?」
「それは、後で説明するね。とりあえず、私の名前は、高町なのはキミの名前は?」
「僕は、緑谷出久です。」
この出会いが、この後の少年の未来を大きく変える出会いであったことをこの時の彼は、知るよしもなかった。

つづく

プロローグ２

人間は、生まれながらに平等じゃない齢４歳で僕が知った社会の現実であった。
それでも僕は、夢が諦められず現在の小学３年生まで今できる事として、将来のためにたくさんのヒーロー達の特徴や戦法などをノートに纏めてきた。
休日の今日も、町中で生で見たヒーローの事をノートに纏めた後家の近所にある公園へ来ていた。
この場所は、小さい頃僕がよく遊んでいた公園だ。そしてここは僕が、個性持ちと無個性とのレベルの違いを思い知らされた場所でもあった。
僕は、ブランコに腰を掛け自分の書いたノートを読み返していた。このノートには、有名なヒーローは勿論のこと、余りマスコミ等に名が上がらないマニアックなヒーローまで全員ではないが纏めてある。このノートは今書いているのは４冊目で今日は、他の３冊のノートも読み返すため持ってきていた。
今は、町の方でヒーローがヴィランと戦っていたので、殆どの子供はそっちの方を見に行ったのか公園には、昼の２時だと言うのに人っ子一人いない。
僕個人としては、そっちの方が人の目を気にせずにすむから楽だが、やはり寂しいと

は感じる。
そんなことを考えながらノートを読み返したり時には、書き足したりして気がつけば一時間が過ぎていた。
「そろそろ帰ろうか・・・!?」
帰ろうと僕が、ブランコから立ち上がろうとした時突然強い揺れが僕を襲った。
「地震!?」
一瞬そう思ったが、すぐにそれは、違うと分かった。何故なら、回りの景色がどんどん歪んでいっているのである。
そして次の瞬間今まで足がしっかりと立っていた筈の地面に足が沈んだいや地面が消え重力に逆らえず落ちた。
僕は、突然の出来事で叫び声すらあげることができず落ちていった・・・・・・
「あれ?ここは!?」
僕は、目を覚ますとまわりは、人がいないそして見たことの無い公園だった。一瞬ヴィランに連れ去られたと思ったが、その割りには回りには誰もいないし自分の持ち物は、全部手元にあるので違うと結論が出た。
考えてるだけではらちがあかないと思い、僕は回りを探索するために公園を出た。
公園を出て町だと思われる場所に出たが、僕はそこを見て目を疑った最初こそ町並み

から日本じゃないかもとは思っていたが、お店などの看板であろう物に書かれている文字は今まで見たことがない奇妙な文字なのに、行き交う人の話す言葉は、確かに日本語の発音なのだ。

僕の知っている限りこんな文字は、見たことがないしここがもし国内だろうが外国だろうが、こんなに大きな町や自分の視界に入っている雲に届きそうな程の建物があるなら、忘れていたとしてもすぐ思い出せる。

そして何より、さっきから何かがおかしい。

直感でしかない。

しかし僕は、何かを見逃している気がする。

大切なことに気がつかないそれは、まるでパズルのピースが１つ足りないそんな感じだ。

僕は、その足りない物が何か必死で考えていると、僕の横を話ながら歩いている２人の子供がすれ違った。

「お前将来の夢何だよ?」

「僕は、お父さんみたいな魔導師になりたいな」

僕は、その話の内容を聞いた瞬間驚いた。

さっきの少年は、「魔導師」になりたいと言ったのだ「ヒーロー」ではなく「魔導師」

と。

聞いたことの無いに職業だ。いや意味などは、何となく理解できる多分魔法を使う職業なのだろう。しかしそこがおかしいのだ。「個性」じゃなく「魔法」なのだ。

僕は、これに気づくと直ぐに回りを見渡した。すると、回りには、普通に人がいた。確かに普通に人がいるしかし全員が普通なのだ。悪口などの比喩的表現ではない。

世の中の8割の人間が個性を持った現在の超人社会では、普通回りを見れば一人は、体の一部又は、全体的に人間のそれとは違う見た目の人が目に入る筈なのだ。しかしここには、それがなかった。肌や髪、目の色等の違いはあるが、逆に言えばそれしか違いが無いのである。

そして勿論ヒーローらしき人物もいない。

取り合えず考えるのを後にして状況をより知るために誰かにここが何処なのかを聞くことにした。

その時偶然一人の女性が目に入った。見た目は、茶色く長い髪で、僕より確実に歳上であろう女性だった。服装が、さっき偶然人を逮捕しているところを見た時にいた人と同じ服装だったので、警察のような役職または、さっきすれ違った少年の言っていた魔導師と言う人かも知れないと思いここが何処だか聞いてみることにした。

もしかしたら僕が知らないだけ又は、忘れているだけの国かもと言う非常に低確率な

希望的予想もあったからだ。
「すいませんここが、何処だか分かりますか？」
「ここは、ミッドチルダの首都クラナガンだけどどうしたの？」
　帰ってきた答えは、やはり知らない国と都市の名前であった。しかし何故そんな場所に自分は、来たのだろう？きっとこの国に来る前に起こった地震のようななにかと、急に足下の地面が消え落ちたことが関係しているのだろうと言うより、それ以外に原因は考えられなかった。
「え!?もしかして、キミ次元漂流者!?」
　幾つもの考えを巡らせていると、さっき話しかけた魔導師の女性の口から魔導師同様知らない言葉が出てきた。
「次元漂流者？」
「それは、後で説明するね。とりあえず自己紹介、私の名前は高町なのはキミの名前は？」
「僕は、緑谷出久です。」
「それじゃあ、出久くん今のキミの現状を説明したりするためにも、私と一緒に来てくれるかな？」
　この後僕が置かれている現状を説明された。

この世界には次元の海と言う物があり、今僕がいるミッドチルダを含めて無人有人含めて数多くの世界が次元の海にあるらしい。管理局と言うのは、そんな次元の海にある世界を管理している組織らしい。

そして、僕が感じたあの揺れは、次元震と言う現象で僕は、それに巻き込まれこのミッドチルダと言う魔法の文化がある世界に流れ着いたのだと言う。

簡単に言えば惑星とかのレベルでの迷子のような物だ。

しかし僕の場合は、そんなに簡単に済ませられる事じゃなかった。

何故なら、地球自体は存在するしなのはさんも地球出身なのだが、個性なんて物は発現してないし、勿論ヒーローなんて職業も無いらしい。

つまり、現在発見されていない世界から僕は、流れ着いたあるいは、平行世界から流れ着いた可能性もあるらしいが、どちらにしても直ぐには、帰れないと言われた。

一応こちらでの生活は、管理局の方で手配してくれるらしいので、野宿になることは無いのだが、今頃元の世界の方では僕は、行方不明になってるので大騒ぎになることだろう。

その後は、なのはさんと別れて僕は、管理局の人にミッドチルダを案内してもらう事になった。

数時間後・・・

今日は、僕にとって厄日だと思う。
だって知らない世界に飛ばされて、現在は空港の大火災に巻き込まれ絶賛燃え上がる空港内を出口を探して走り回っている。
同日にここまで大ハプニングが続くと何かあるんじゃないかと思ってしまう。
そんなことを考えていると、何処からかかすかに人の声が聞こえて来た。僕は、声が聞こえた方向に顔を向けた。そこには、青髪の女の子がいた。僕は、その子の方へ走ろうとしたとき、女の子は爆風によって近くの石のオブジェクトの前まで吹き飛ばされた。
その直後だったオブジェクトのにヒビが入り女の子の方へ倒れてようとしていた。その時僕は、咄嗟に彼女の方へと走り出し、女の子とオブジェクトとの間に入りオブジェクトに向けて手をかざしていた。考えるより先に体が動いていた。しかし、それより驚いたのは、かざした手から強風と共に炎・雷・氷が放たれ倒れてきていたオブジェクトを粉々に粉砕した。
その後僕は、安心させるために女の子に向かって僕が憧れたヒーローの言葉を借りてこう言った。
「大丈夫僕が来た！」
しかし一難去ってまた一難今度は、天井を支えていた鉄骨が落ちてきた。もう一度手

をかざしてさっきと同じことをしたが、流石に鉄骨を砕くことはできず鉄骨は、そのままのスピードで落下してきた。

もうダメだと思ったその時

スキャニングチャージ!!

何処からか、聞こえるその音声と共に赤・黄・緑の三色の輪が現れそれを蹴りの体勢でくぐり抜けた何者かが鉄骨を蹴り砕き僕と女の子の前に着地してきた。

その見た目は、胸に3種の動物と思われる絵が刻まれた円形のプレートがあり、全体のベースが黒に頭は赤、胴体は黄、脚部は緑の異形の姿をしていて、腰には、スロットの様な物がついているベルトらしき物が巻かれていてそこには、体の色と同じ三色のメダルがはめ込まれていた。

そんな観察をしていると、上空から白い衣装に身を包んだなのはさんが救助に来たので、状況を説明した。

「ご協力ありがとうございます。」

「別に大したことはやってない。それじゃあな。」

「待ってください!!あなたの名前は?」

僕は、彼に名前を聞いた。

「オーズ・・・仮面ライダーオーズだ。」

そう言って彼は、炎の中に姿を消した。
その後僕と女の子は、病院に搬送大きな怪我は無かったが、念のため入院することになった。
退院後は、魔法適正の検査で変換資質３つに希少技能まで持っているので大騒ぎになったり、僕が助けた女の子スバルナカジマさんの家でお世話になる事になったりもしたが、一応帰る手段が見つかるまでは、魔導師として働く為に訓練校に行くことになった。
???ｓｉｄｅ
パリン!!
３枚のメダルが砕けた。
「あー砕けちまったか・・・やっぱり試作品だったからなー」
そう言いながら彼は、銃のような物を壁に向けて撃つとそこに穴が生まれた。
「とりあえず、帰って再製作だな」
そう言って彼は、その穴の中に入って行き消えて行き穴もそれと同時に消えた。

つづく

二組目の試験　前編

一人の緑色の髪の少年がビルの屋上と思われる場所にいた。普通なら授業をサボっている生徒だとか、高い場所から周りの景色を見ているだけだとかの答えにたどり着くだろう。しかし、それは普通ならの場合だ。

少年や彼の周りには、現在普通では無い点が幾つかあった。

1つは、少年の身なりである。彼の服装は、運動ができる服装しかも何かの訓練をするようなしっかりとした服装をしている。それだけならば別に何も気に止めることは、無いであろう。しかし、左手には機械的な杖を持ち右手には現在の服装には、合いそうもないガントレットが付いていた。

そして、2つ目は場所である。普通の建物の屋上ならば百歩譲って少年の格好は、痛い人。所謂少年位の年頃の子供にありがちな厨二病だと考えられる。しかしこの建物は、ボロボロであった。まるで何年も放置されているかのように、あちこちにヒビが入ったり壊れていたりしている。しかも、このような状況の建物は、少年がいる建物だけではなかった。少年の周りにある、ありとあらゆる建物や道路も同じような状況であった。

まるで少年以外の人間が誰1人と存在していないのかとさえ思ってしまうほどである。

そんな場所で少年は、準備運動を始めた。

何度が屈伸などをしていると、少年の背後にあった扉が開き少年より5つほど年上と思われる少年が、自分の身の長以上はある。巨大なチェーンソーのような剣を担いで現れた。

「おっ！先に来てたのか？」

「うん帰りが予想より早く付いたからね。」

「んで数年ぶりの故郷はどうだったよ？」

「うん!!家に帰ったとたん母さんに大泣きされて大変だったけど、大きな変化はなかったよ。」

「ここにいるってことは、説得はできたんだな？」

「うん、」

「なら、さっさと今回の試験をクリアして祝杯をあげるとしますか!!」

はやて・フェイトｓｉｄｅ

「はやて今日はもう一組試験を受ける子達がいるんだよね？」

フェイトはヘリの中で、はやてに訪ねた。
「うん、相方が次元漂流者で最近故郷の世界が見つかったらしいんやけどマシントラブルでこっちに帰って来るのが今日まで遅れたらしくて、相方の到着が少し遅れるかもしれんって連絡来たけど、どうやら問題なく到着したようやね。」
「へーどんな子達なの?」
「次元漂流者だった方の子は、名前は緑谷出久。4年前の空港火災があった日に次元漂流者としてミッドに迷い混んで偶然なのはちゃんと出会った子で、その日の内に空港火災にも巻き込まれて、スバルと一緒に救助された子。今はスバルの家族に引き取られて一緒に暮らしてるんよ。」
「名前からすると、地球の日本出身っぽいけど?」
「確かに地球出身やけど、私達が知ってる地球とは違うみたいやね。国の名前とかはほとんど同じやけど、出久が暮らしてた地球では世界総人口の約8割が個性っちゅういわゆる超能力を持った人なんやって。」
「じゃあ彼も超能力を?」
「いいや、彼は残りの約2割の方で超能力は、持っとらんらしい。」
この時はやての表情が一瞬暗くなったので、出久は周りから余り良い扱いは、されてなかったのだろうとフェイトは、思った。

「そっか。それじゃあもう1人の子は？」
「名前はヨゾラ・ハルトヴァーナ。3年前に陸士訓練校を1年で卒業する程の天才で、それからは訓練校からのパートナーの出久と共に、管理世界に現れる危険な巨大生物の捕獲や、討伐等の任務に多く携わっとるね。」
フェイトは、どちらも将来有望な魔導士だねと口にしたが、はやては次に気になることを話した。
「確かに優秀なんやけど、ヨゾラ・ハルトヴァーナは名前・血液型・出身地とかの3年前までの記録はしっかりあるんやけど、3年以上前の経歴がほとんど分からんのよ。明確に分かってるのは、陸士訓練校に入る1年くらい前は地球の日本で半年間暮らしてたんと、それ以外に1年に1回地球に行っとることぐらいやね。」
はやてが話し終わるとほぼ同時に試験開始の合図が鳴ったので、はやてとフェイトは、二人の試験を見ることに集中した。

つづく

二組目の試験　後編

ヨゾラｓｉｄｅ

俺と出久は、今回の試験官のリインフォースツヴァイ空曹長から今回の試験の説明を聞いてスタート地点で構えを取った。

構えを取ってからどれくらい時間が経過しただろうか？若干の緊張に時間の感覚を狂わされ、1秒1秒が非常に長く感じる。しかし試験に対しての緊張は、ほとんど無い。問題は自分が何者か自分の正体を悟られないかに関してだった。

この場には、自分の正体に気付きそうな人物が1名来ている。

感じるのはあのヘリの中。

懐かしく、しかし昔とは違う物だとはっきりと分かる感覚もう「アレ」からは完全に切り離され、自分も殆ど別の「者」へとなってしまっても遥か昔の記憶が微かに感じ取るその存在。そしてそれがあると言うことは、間違いなく彼女もここに来ているのだろう。

リインフォースツヴァイは、彼女が消滅して後に産まれた存在であり、話ぐらいは聞

いたことがあるだろうが実際その力を目にした訳ではないので、正体を悟られることはほぼ無いのだが、彼女は違う。
彼女は当事者なのだ。
彼女は被害者なのだ。
彼女は体験者なのだ。
俺の事を最も近くで目にした1人であり、今生きている者の中で最も長く俺を目にした「主」である彼女は、何かの拍子に俺の隠している真実に気が付く可能性が最も高い。
いつも以上に気を付けてなければならない。
そう強く思った直後試験スタートの合図が鳴った。
（どうか気付かれませんように）
合図と共に走り出した俺は、心の中で強く願いながら試験クリアのために前へと進む。

ヨゾラｓｉｄｅｏｕｔ

ヨゾラと出久はスタートと同時に二手に別れて行動を開始した。
ヨゾラは担いでいた巨大なチェーンソーのような剣「ブラッド・サージ」でターゲッ

トを凪ぎはらって行き、出久はその手に持った杖型のデバイスで魔法を放ち1つ1つ確実に破壊して行った。
その後二人は、予め決めていた合流地点で合流し次の地点に向かった。
次の地点では、出久は杖を腰の入れ物に納め右手のガントレットを構えてターゲットへと向かい次々と破壊して行った。
ヨゾラは「ブラッド・サージ」を巨大なチェーンソー型の剣から巨大な銃へと変形し遠距離攻撃をしてくるターゲットを撃ち抜き出久のサポートへと回っていた。
「場所や相手に合わせて、2人がそれぞれ役割を交代して戦況を有利に進めていくなんて・・・」
「ほんま器用なことするわ」
フェイトとはやては、ヨゾラと出久の高いコンビネーションに下を巻いた。
しかしこの後2人は、さらに驚愕することとなった。

出久ｓｉｄｅ

僕とヨゾラの二人は、今回の試験の最大の難所と言われる大型オートスフィアへと差し掛かった。

この難所では、中距離自動攻撃型の狙撃スフィアを破壊しなければならず、受験者の半分以上がこれで脱落する最終関門でもある。

僕は、ヨゾラと分かれオートスフィアのいる建物へと向かい、ヨゾラもとある準備のために別行動を開始した。

僕はオートスフィアの目の前ま到着し、オートスフィアは僕を見つけると攻撃を開始し、僕はそれを回避することに専念した。

攻撃を回避し続けて2分ほど経ったときヨゾラから準備が完了したと連絡が来たので僕も行動を開始する。

まず、オートスフィアを氷で覆いそのまま自分のレアスキルで風を生成しその風を推進力にしてオートスフィアを建物内から外へ落とし、僕はさらに炎と雷を纏ったキックでオートスフィアへのダメージと落下速度を上昇させ風を使った飛行で自分は無事に着地した。

そして、さっきのキックと落下によって氷から解放されたオートスフィアを、再度動けないように回りと一緒に凍らせ予め、オートスフィアの落下地点近くで待機していたヨゾラがオートスフィアの前でとある弾を放ちまだ破壊されていないオートスフィアを放置して僕達は、ゴールへと向かった。

出久ｓｉｄｅｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

私とフェイトちゃんは、困惑していた。

現在試験を受けているこの二人は、オートスフィアが動けないようにこそすれど、破壊せずにゴールへと向かって行ったのだ。

確かに動きこそ封じたが、今回の試験内容ではオートスフィアの破壊が求められているのでゴールに到着してもオートスフィアの破壊がなされていないので大幅な減点が入るのである。

時間はまだ若干余裕があった筈なのに彼らは動きを封じたらヨゾラが銃状態で攻撃を２回放っただけで、躊躇いもなくそのままその場を後にしたのだ。

私もフェイトちゃんも彼らの行動の意図が理解できなかった。しかし、彼らがゴールを黙視できる程の距離に到着した時それは起こった。

突然オートスフィアに攻撃が当たりオートスフィアが破壊されたのだ。

その後二人は、ゴール前のターゲットも難なく破壊しゴールした。

つづく